

『竹取物語』に見える神仙否定の論理

——『浦島子伝』との比較構造論的考察——

善養寺 淳一

一、はじめに

物語文学の祖とされる『竹取物語』^①の研究史では、その成立年代と並んで形成過程としての背後のプロセスの解明もきわめて大事な問題とされている。この物語については古い伝承や中国文学の影響など、これまで多角的な研究がなされている。特に近年中国文学との類同という視点からは『漢武帝内伝』を取り上げている渡辺秀夫氏の業績が挙げられる。^③

本論考では、このような研究史をふまえ『竹取物語』とその先蹤文学との構造比較を行い、後述の観点から『竹取物語』の大きな特色といえる神仙否定の論理について考察し、またそれを基に本作品の神仙・異界文学思想史上の位置が如何なるものかを考究したい。

先蹤文学との比較を行う前に、本論考の目的及び論考中の基本的な用語の意味について略説しておきたい。本稿は古代日本文学における道教受容研究の一部を成すものである。

より具体的には、我が国に流伝した道教の中核的要素たる神仙思想が、文学作品に如何なる影響を与えたのかとい

う点を解明することを目的とするものである。特に重要な概念である「神仙」、「神仙否定」、「神仙否定の論理」及びこれらに関連する「神仙譚」について述べておきたい。まず「神仙」とは、不老不死の術を修得し神通力を持った存在であり神仙思想を扱った話に登場する。これに関する物語や話が「神仙譚」となる。この例としては『日本霊異記』上巻第十三が挙げられる⁽⁴⁾。次に「神仙否定」、「神仙否定の論理」については『竹取物語』の全体構造についての稿者の見解を述べておくのが捷徑であろう。

稿者としては『竹取物語』を貫く全体構造は、天上界（神仙界）と地上界（人間界）との断絶であると考えられる。それは換言すれば、無限或いは永遠性と、有限或いは一回性という対置される概念として捉えられる。両界の論理は根本的に相容れない対立概念である。これは次に掲げる『竹取物語』の構成と展開のうちに、後述の内容として看取できる。

- (1) 竹取の翁の紹介とかぐや姫の誕生、(2) 五人の貴公子の求婚、
- (3) かぐや姫の与えた難題、(4) 帝からの求婚、(5) かぐや姫の昇天

右の構成から成るこの神仙譚は、大略次のような展開を見せつつ結末に至る。(1)の姫の誕生は、人間界の意向と何ら関わりなく、天上界の意向により降されたものである。(2)では人間界の貴公子の求婚は全て拒絶される。(3)の姫が要求した奇品は入手不可能な物であった。(諸家の注釈⁽⁵⁾では「仏の御石の鉢」は仏教的故事でこれを用いる者の貧富の差により布施が増減する物、「蓬萊の玉の枝」は神山に在りその華実を食すれば不老不死となる。「火鼠の皮衣」は中国神仙譚に見える伝説上の動物で火中に棲む。「竜の頸の光る玉」は想像上の神獣の額下に在る奇物。「燕の子安貝」は生殖の神秘の取合わせで発見困難な物。) (4)では地上の最高権力者たる帝の命令も拒まれる。そして(5)では六衛府二千人の兵を斥けてかぐや姫は昇天する。このように見てくると悉く天上界の論理が罷り通り、人間界の論理(例えば、翁が適齡の姫に結婚を勧めても、色好みの貴公子が求婚しても、また帝の命じる入内ですら)すべてはねのけられるのである。では神仙界と人間界との交点は何処か、高橋亨氏によれば、それは①姫を発見した「野山」(竹の節⁽⁶⁾)

と、②姫が月に帰還する場面で、天人が降臨する「翁の家」とが、「異界と現世とが交錯する時空」である⁽⁶⁾という。たしかにこの交点は本文に顕在化した部分である。この二つの交点と等しく重視すべきは、この二つの論理のせめぎ合いのはざままで、終盤に向けて徐々にかぐや姫の「人間化」が描かれる点であろう。その結末は昇天の段で、かぐや姫が翁夫婦と涙ながらに別れる人間的場面へと収斂していく。姫は人間界淹留により、人間は神仙の如く生きられない儂い存在であるがゆえに、有限の生を懸命に生きるのだということを学習したのだと思う。それは、前掲(1)から(4)のように人間界の論理を拒絶し続けた姫の心に、人間の所業を「あはれ」と感じ、暫しであっても昇天をためらう心を芽生えさせたのだと考えられる。

この思いは、天上界と人間界との境界領域で姫が悟った「神仙否定」である。また創作という視点からは、このような結末場面に導いた物語作者は、「神仙否定の論理」を基調とした構想(神仙界に対する人間界の優位性という認識)を持つていたものと推測される。

右に述べてきたように、この「神仙否定の論理」は、物語終盤にのみ見られるようであるが、私見では物語全体に一貫しているものと考えられる。その理由は、前掲の物語の構成(1)から(4)までは、この論理が表面化はしないものの、翁の家での日々の暮らしの中で、かぐや姫の心の内なる人間の変容は確実に進んでいたものと推測されるからである。姫の高飛車とも思える外面の態度と、人間社会に養育されつつ人間の実相を習得した姫の心とは落差はあるものの、神仙という越えがたい立場からの、人間存在への深い理解に至ったのではないだろうか。このような観点からは、(1)から(4)までは、(5)の姫の神仙否定の態度を劇的に描くための壮大な「伏線」と考えられ、物語作者は、(5)の昇天という極点を志向して筆を進めたものと考えられる。この点において物語作者は、渡辺秀夫氏が指摘するように「神仙を無化し乗り越え⁽⁷⁾」ることによって、人間の心の優位性を神仙譚の結末に織り込んだのであった。このような論理を取り込んだことは、物語の構成上如何なる効果を齎したのか。それは『竹取物語』は神仙譚には違いないが、その内容は、神仙の永遠性を高次元で否定し、寧ろ人間性への回帰という主題を改めて提示したものと考えられる。この

点は、二以下の先蹤文学との構造比較で明らかにしていきたい。

ここで『竹取物語』と構造を比較する対象は『丹後国風土記』（逸文）「浦嶋子」である。管見ではこれまでの研究史のなかで、両作品の構造比較は見当たらないのであるが、伝奇小説の系譜という視点から論じたものとして三谷栄一氏が次のように言及している。

特に注目すべきは『栢枝伝』や『浦島子伝記』であり、それは日本の土着的なカタリゴトを漢文でもって文芸的に綴った作品である。（三谷栄一『物語文学の世界』有精堂、三〇〇頁、傍線稿者）

さらに、厳紹邊氏が、江戸時代の国学者加納諸平の『竹取物語考』の「物語」形成についての見解をふまえて『浦島子伝』にふれ、次のように述べている点も注目される。

一種の文学様式としての「物語」は、日本民族文学の長期にわたる発展の賜物である。（中略）『浦島子伝』のような日本民族文化の個性を備えた古代漢文伝奇は、「物語」形成の直接の基礎を提供した。（中西進・厳紹邊編『日中文化交流史叢書「6」文学』大修館書店、一六八頁。なお右の引用は丹羽香氏の訳による。傍線稿者）

厳氏の述べる「物語」形成の直接の基礎という部分で、改めて加納諸平の『竹取物語考』を参照すると、この注釈の冒頭の「総論」には次のような記述がある。

（諸平は『源氏物語』絵合の「物語の出来始めの祖」の記事や『大和物語』の歌を引いたうえで）昌泰年間の頃絵冊子とし、故事ともせしを以て、ふりにし物語なること知られたり。今按ふに、其の事蹟は、藤原宮の頃と覚しければ、もと、浦島子伝・栢枝仙伝などに倣ひて作れる書なりしを、後、其意をのべ、歌をも加へて、物語とせしなるべし。（傍線稿者）

諸平の注釈は、以下「然思はるゝ由を云はん。」と述べて『竹取物語』の五人の貴公子を歴史上の人物に擬しており、これは三谷氏も取り上げている問題である。諸平は「浦島子伝」を挙げながらも、『竹取物語』との構造比較をして

いるわけではないが、私見ではこれは『丹後国風土記』（逸文）「浦嶋子」がそれに当たるのではないかと考えられる。両作品の構造分析の試みは、冒頭に述べた『竹取物語』の形成過程、或いは素材論、構想論、更には作者の解明に資するものになるかと思う。

『竹取物語』には神仙思想が投影されているのであるが、このような、神仙世界に関わる先蹤の文学としては、『丹後国風土記』（逸文）「浦嶋子」が挙げられる。

「浦嶋子」は漢文学作品であり、仮名作品である『竹取物語』とはその文体は大きく異なるものである。また『風土記』は、詔命による官撰地誌であり、その分量も『竹取物語』のような長さには遙かに及ばない作品である。しかしながら、その構造を比較してみると、『竹取物語』は「浦嶋子」の陰画（ネガ）と言える程に鮮やかな対照が見られる。構造的に見るならば、『丹後国風土記』（逸文）「浦嶋子」をほぼ反転した作品が『竹取物語』となる。私見ではこの構造比較という作業から、『竹取物語』の神仙否定の姿勢が明瞭に浮かび上がってくるように思われる。よって本論考では次に掲げる三つの観点について追究し、比較構造論的に結論を導くことにしたい。

- 1、奈良時代成立の『丹後国風土記』逸文「浦嶋子」と、平安中期成立の『竹取物語』との構造比較をすることで、両作品の全体構造及び部分的構造の対照性を明らかにする。
- 2、1の構造の対照性は、同時に時間性・空間性の対照的構造であることも明らかしたい。また、この点が『竹取物語』の神仙否定の論理とどのように繋がるのかも考究したい。
- 3、『竹取物語』の意義を明らかにすることで、本朝神仙・異界思想文学史上の定位を試みたい。

二、『竹取物語』と『丹後国風土記』（逸文）「浦嶋子」との構造の比較

まず、両作品の全体構造の比較について述べ、以下、粗筋を辿りながらそれぞれの部分的構造を比較してみたい。なお本文は『丹後国風土記』（逸文）「浦嶋子」は、対校を経た古典文庫『浦嶋子伝』（重松明久、現代思潮社、昭和五十六年）に拠り、『竹取物語』は、新日本古典文学大系17『竹取物語』（堀内秀晃校注、岩波書店、平成九年）に拠る。

両作品の全体構造（Ⅱ基本構造）の比較（番号0）

0 往訪譚と来訪譚という対照的構造

『丹後国風土記』（逸文）「浦嶋子」（以下、『風土記』と略す）と、『竹取物語』とは、作品の基本構造が反転しており対照的である。

両作品の基本的な構造として、『風土記』では地上（現世）の者である嶋子しまこが、「蓬山とじよのくべ」という他界（異界）を訪れ、「三歳みとせ」の間淹留した後、故郷に帰還する往訪譚である。これに対し『竹取物語』は、「小さ子（Ⅱかぐや姫）」という異界の者が、地上（現世）に「降され」ここで成人となり「月の都」という他界（異界）へと昇天する来訪譚である。（後述、『風土記』の「三」「五」の数字は、『竹取物語』でも鍵となる基幹の数字である。）

両作品の内容に於ける各要素の部分的構造の比較（番号1〜10）

1 主人公の性別と属する世界の比較

『風土記』の主人公嶋子しまこは容貌端正で風流みやびな地上（現世）の男子であり、『竹取物語』の主人公は（異界の）絶世の

美女である。

『風土記』の主人公は、物語では一漁民である。一方『竹取物語』の主人公は結婚適齢期を迎え、行く末を心配する翁が、かぐや姫に「変化へんげの人といふとも、女の身持ち給へり。」と言って、異界の者であることも承知のうえで結婚をすずめている。かぐや姫は、昇天前に自分が月の都の者であることを翁・嫗に打ち明け、さらに昇天の段では、天人が翁に「かぐや姫は、罪をつくり給へりければ……罪の限り果てぬれば、かく迎ふるを」と、地上にかぐや姫が降された理由と、地上での滞在期限を説明している。

2 異界の者の出現時の状況とその「乗物」の比較

『風土記』では主人公は「三日三夜みかみさんよ」も魚一匹釣れずという甚だしい不漁の後に五色の亀を釣り上げそれは亀比売かめひめに変じた。主人公から亀比売に対し、何処からやって来たのか、との問いに対し、亀比売は、「風雲かぜくもの就来むたきつ」と答える。つまり風雲とともに仙界からやって来たのだ、との説明である。一方『竹取物語』では翁が発見した不思議な「もと光る竹」の「筒の中」に「三寸ばかり」の小さき子（主人公の女の子）が座っていた。『風土記』の「風雲」は、同作品末尾にも亀比売から渡された玉匣を開けると、「芳蘭かぐはしき体すがた」は「風雲」とともに連れ去られ、天空に飛んでいく場面にも見られ、一種の「乗物」であろう。

『竹取物語』では「筒」という空洞が乗り物と考えられ、武田友宏氏が「この空間は、異界と人間界を結ぶ交通路なのだ。異界からの旅人が時空を超えて、この人間界を訪れるときの乗り物ともいえる。」と述べている。また物語末尾のかぐや姫の昇天の段では、迎えにきた天人の「飛ぶ車」に乗って姫は昇天した。このように見ると両作品共に異界から現世（人間界）に来訪するには、外形は異なるがこのような「乗物」を使っている。

3 現世の主人公の異界往訪時と帰還時・異界の者の現世来訪時と帰還時の機構の比較

『風土記』、『竹取物語』共に、現世と異界という二つの異質な時空を組み込んだ作品であることから、両界の往返には特別な仕掛け（機構）が必要となる。『風土記』では主人公嶼子は、異界たる「蓬山」に赴く際、亀比売に眠らされ、異界淹留の後、故郷帰還の際にも眠らされている。これに対し『竹取物語』の場合は、主人公の小さ子（かぐや姫）が人間界に降された場面の描写はなく、その状況は不明であるが、前項の武田氏の指摘のように、竹の空洞が時空を超越し現世に降される際の「乗物」と考えられる。またかぐや姫の昇天では、天人の持参した「壺なる御くすり」をなめ、「天の羽衣」を着せられることが、現世から異界への昇天の機構として対応する。その後、姫は「車」に乗り昇天した。

4 求婚者の比較

『風土記』では異界の者である亀比売が誘い結婚に至った。『竹取物語』では、人間界の五人の貴公子や、地上世界の最高権力者である帝が求婚者である。

『風土記』では主人公嶼子の生業は漁師と考えられるが、「三日三夜を経て、一つの魚だに得ず」という異常ともいえる不漁の後に釣り上げたのは「五色の亀」であった。この亀について重松明久氏は「五色（青・黄・赤・白・黒）の色をした亀」と解釈し、『延喜式』治部省条の祥瑞の神亀を挙げている。この亀の五色については水野祐氏（註）が、「五行に係する五彩」とし、この「浦嶋子」伝説全体に「著しい中国の神仙思想が導入されていることが明白に感取される。」と述べている。三谷栄一氏はこの数について、「前段の語り出しの部分は、『竹取物語』のもととなった口承文芸の影響によって「三」という数字が強調されていたが、五人の貴公子の名前からわかるように、この部分は『竹取物語』の作者が、書かれた作品として独自にその説話を解体して創造した部分なのであって、そ

うした聖数が守られずに「五」という数字に発展したわけである。」と述べている。なお、『風土記』本文で「三」と「五」の数字が現れる記述は次の箇所である。(傍線稿者)

(一)三日三夜、(中略)乃ち五色の龜を得たり。(古典文庫『浦島子伝』一一頁、以下同じ)

(二)既に三歳を還たり。(一二頁) (三)今、三百余歳を経つといへり。(一三頁)

一方『竹取物語』本文で「三」、「五」の数字の出現は次の箇所である。(傍線稿者)

①三寸ばかりなる人、(新古典大系『竹取物語』三頁、以下同じ) ②三月ばかり(四頁) ③三日、うちあげ遊ぶ。(四頁)

④色好みといはるゝかぎり五人、(六頁) ⑤五人のなかに(九・一〇頁) ⑥五人の人々も(一一頁) ⑦三年ばかり、(一三頁) ⑧三日ばかりありて、(一五頁) ⑨かまどを三重にしこめて、(一五頁) ⑩「竜の頸に、五色に光る玉あり。

(一三頁) ⑪三年ばかりありて、(五九頁) ⑫地より五尺ばかり(六九頁)

右の本文からは『風土記』の数字の「三」、「五」の出現が、『竹取物語』のそれに似ていることがわかる。確かに言えることは、物語の構成上骨格をなす、両作品共に重要な数字である「三」「五」は共通するということである。

5 二親の対比と親による主人公への説明の比較

両作品共に父母、(養)父母がいるが、それは神仙と人間の違いがある。また両作品共に親から主人公に両界の別が説かれる。

『風土記』で嶼子が亀比売に誘われて到った「蓬山」には、「女娘(亀比売)の父母」がいた。当然にこの二親は神仙である。一方『竹取物語』では「月の都」という異界から来訪した「小さき子(かぐや姫)」は、竹取の翁と妻の媪が(養)父母となる。こちらは現世の普通の人間であるが、姫の「こゝには、かく久しくあそびきこえて、慣らひたてまつれり。」という発言からは、翁夫妻は、実の父母に限りなく近い存在ということになる。

両作品共に、一つの物語の中に、異界と現世の二つの世界と、この両界間の移動を包摂する以上、両界の断絶を解

消するために、人間或いは異界の者に対し、一定の説明が必要とされる。『風土記』の主人公嶼子は、「蓬山」に到り、亀比売の二親から「人間と仙都との別」が説かれ、一種のガイダンスが行われている。一方、『竹取物語』でも、翁が、異界の者とはいえ、結婚適齢期を迎えたかぐや姫に、この人間界では「おとこは女に婚ふことをす。女は男に婚ふ事をす。そのちなむ門ひろくもなり侍る。」と現世での習わしを説いている。両作品のこのような一種のガイダンスは、『風土記』『浦嶋子』では、神仙界という異界に淹留する諸注意や要領であろうし、また、『竹取物語』では、かぐや姫に対して、人間界の常識や習慣、女性としての生き方を説いたものという点で、異界と現世との別が対比されて描かれている。これは、両作品の主人公が、己の出身の世界と異なる世界で、諸々の問題なく滞在できる工夫が織り込まれているものと考えられる。

6 祝宴の対比

主人公に対する祝い事が、異界と現世それぞれの舞台で繰り広げられる。

『風土記』では、主人公は赴いた異界で歓迎を受け宴が催される。また、『竹取物語』では、現世（地上世界）に降ったかぐや姫は、三か月という短期間で一人前の女性に成長し、翁夫婦は成人式として髪上げと裳着を行い、三室戸齋部の秋田に「なよ竹のかぐや姫」と命名してもらった。つまり、『風土記』では異界に赴いた人間が神仙に祝つてもらうものであり、『竹取物語』は、人間世界で異界の主人公が祝福を受けるという構図である。

7 神婚の比較

両作品に於ける神婚の成立、不成立の対比が見られる。

『風土記』では主人公は神女（亀比売）から永遠に一緒にいたいと言われ、蓬山に行き、祝宴の後、亀比売と夫婦の交わりを行う。この神婚は一旦成立するが、その後嶼子の帰郷により破局を迎える。これに対し、『竹取物語』では、

かぐや姫は五人の貴公子の求婚に対し、それぞれに難題、奇品を課しこれをしりぞける。また姫の美貌の噂を耳にした帝は、内侍を翁宅に遣わし、妃になるよう要請するが、姫はこれもしりぞける。以後、帝は翁に姫を差し出すように命じるが、姫は宮仕えを拒否する。更に帝は計略をめぐらすが、姫は姿を消してしまった。その後、姫は帝と歌を交わし手紙のやりとりを重ね、三年ほど心を通わせる。昇天の段では姫は帝に手紙を奉り、違勅を詫び帝を慕う心情を吐露した。昇天に際し、姫は壺の不死の薬と手紙を帝に献上するが、帝はこれを駿河の国の天に近い山で燃やすように指示した。結局、五人の貴公子や帝と、かぐや姫との神婚は不成立であった。

ここで興味深いのは、現世から異界へと赴いた浦嶋子と亀比売の神婚は、後に破局はするが一応成立している。しかし異界からやって来たかぐや姫と五人の貴公子や帝との神婚は不成立である。異界での神婚は成立しても、その逆は不成立であった。これは何を意味しているのだろうか。異界の者の好意（選択）による神婚は可能でも、人間が異界の者との結婚を成立させることは難しいのだろうか。つまりあくまで結婚の可否という選択権は、異界或いは神仙界の者という絶対者の手にあることを暗示しているのではないだろうか。

8 異界と現世での滞在期間の共通点とその時間経過の差異の比較

『風土記』では、主人公嶋子は亀比売に誘われ異界を訪れるが、そこで神婚が成立し異界に淹留することが三年に及んだ。これは、神女たる亀比売と心を通わした時間でもある。この時間は主人公が故郷に帰還してみると、故郷の村人は嶋子が行方知れずになってから「三百余歳」が経ったと言った。つまり異界の一年は現世の百年に相当することになる。この点については、新日本古典文学大系『竹取物語』脚注（六三三頁）でも言及している。一方、『竹取物語』ではかぐや姫が竹のなかに居て翁に発見されて、翁夫婦の手によって養育され成長の後、五人の貴公子の求婚を経て、帝と心を通わすこと三年程が経った頃に、姫は月を見ては物思いに沈み、やがて涙にくれるようになった。姫の昇天の段では、姫を迎えにきた天人の「王とおぼしき人」が「翁」に「片時のほど」かぐや姫を人間界に降した、と言っ

たのに対し、翁は、かぐや姫を養育すること「廿余年(ふねん)に成ぬ。」と返し、天人の「片時(かた)」と、翁自身の「廿余年(ふねん)」との時間感覚のずれを衝いている。これは異界と現世との時間経過の差異を、作者が『風土記』同様に正確に表現したものと考えられる。このような時間経過の感覚の表現について、『風土記』では主として異界(仙界)を舞台にしており、『竹取物語』では地上世界を主たる舞台としているという対比が見られる。

9 主人公の帰郷の心情の比較

『風土記』の主人公嶋子は「蓬山(とこよのくに)」で亀比売と三年を過ごしたが、にわかに故郷が懐かしく、両親を恋しく思うようになり、その嘆きは日毎に増していった。この様子を見た亀比売は、悩みごとがあるなら打ち明けてください、と言った。主人公はしばらく故郷に戻り、両親に会うことを許してほしいと言った。『竹取物語』では、かぐや姫は帝と歌や手紙のやりとりをして三年程が経った頃、月を見てもの思いにふけり泣くようになった。これを知った翁は、姫が月を眺めることを制止するが、月の出の頃には涙を流すのであった。やがて八月十五日近くの夜、激しく泣く姫に、翁や姫はいつたいたいのかとたずねると、姫は自らの出身が月の都の者であると明かし、もうすぐ迎えが来て月に帰らなければならぬと打ち明けた。姫はこの時に、月の都の父母のことは思い出すこともない、と言い、「こゝには、かく久しくあそびきこえて、慣(な)らひたてまつれり。(月の都に帰ることも) いみじからむ心地(ち)もせず、悲(かな)しくのみある。」と、この地上世界では翁夫婦とは実の親子として暮らしてきたので、その別れが悲しいのだと涙ながらに語った。これは月の都にはもの思いがないが、地上にはあるもの思いの人間の価値を伝えた言葉であった。この両作品の帰郷に際しての主人公の心情を比較すると、構造という点では『風土記』は異界に在って現世の故郷・父母を想い、『竹取物語』は、現世で異界の主人公が人間界の養父母との別れを悲しむという対照的構図になっている。これは物語作者が、天上界には人間界ほどの情愛はなく、地上世界の人間的な恩愛が断ちがたいものであり、愛情という価値が在る人間世界の優位性(＝神仙否定となる)を語ったものと考えられる。

10 異界の者が人間に贈った「もの」の比較

『風土記』では、主人公の嶼子の帰郷に際し、亀比売が「私を忘れることなく、思い慕ってここ（仙界）を尋ねてこようと思うなら、この玉匣を堅く握り、けっして開けて見ようとはしないでください。」と言って玉匣を渡している。『竹取物語』では、昇天の段で、主人公かぐや姫が、天人が降臨し翁夫婦と別れる時に、泣いている翁に手紙を渡している。更に姫は、帝にあてて、帝を慕う気持ちを認めた手紙に「壺の薬」を添えて、頭中将に渡している。その後、翁は姫を失った落胆のあまり病床についた。頭中将から報告を受けた帝は、手紙を読み食事ものを通らなかつたが、勅使として調岩笠を呼び、姫が献上した壺の不死の薬に手紙を添えて、この二つを駿河の国の高い山で燃やすように指示した。

両作品の共通点は、亀比売、かぐや姫（どちらも女性）という異界の者が、地上世界の人間に「もの」を贈り、自分の形見としてしていることである。また両作品の大きな違いは、『風土記』では禁忌を破って玉匣を開けてしまったことであり、『竹取物語』では帝が手紙と壺の焼却処分を指示したことであろう。特に帝の受け止め方は、後述四でふれる「神仙を無化し、乗り越えた」神仙否定の現れと見ることができよう。それは、次のような帝の歌に、不死の薬を無用のものとして、かぐや姫との別れを嘆く心情がよく表れている。

逢ことも涙にうかぶ我身には死なぬくすりも何かはせむ

結局、帝は異界の絶世の美女であるかぐや姫に宮仕えをさせようと迫ったが果たせず、その後は歌（手紙）のやりとりという形で姫に関わっていたのであるが、最終的には、異界からの「もの」は受け入れなかったということである。

三、構造の比較のまとめと分析

右に述べた両作品の構造の共通点と相違(対照)点をまとめると次の表のようになる。
 (なお、共通点は二重傍線——とし、相違点は波線~~~~を付した。)

◎『丹後国風土記』(逸文)「浦嶋子」と『竹取物語』の構造(要点)の比較表

番号	比較項目	『丹後国風土記』「浦嶋子」	『竹取物語』
0	基本構造	主人公が異界へと赴く往訪譚。主たる舞台は「蓬山」(異界)。主人公は、異界にて三年(亀比売と心を通わした期間)滞留の後現世(故郷)に帰還した。	主人公が現世に降される来訪譚。主たる舞台は「地上世界」(現世)。主人公は、現世にて養育され成長した後、三年程帝と心を通わせた後天上界に昇天する。
1	主人公の性別と属する世界の比較	主人公＝嶋子(現世の男性)	主人公＝かぐや姫(異界の女性)
2	異界の者が出現する時の状況とその「乗物」の比較	主人公が海に出て三日三夜を経ても魚一匹釣れず五色の亀が釣れた。亀は亀比売に変じ、「風雲」に乗って来たと言った。	翁が発見した「もと光る竹」の「筒の」中に「三寸ばかりなる人」が座っていた。この筒の中は異界の者が現世に来る「乗物」。
3	現世の主人公の異界往訪時と帰還時・異界の者の現世来訪時と帰還時の機構の比較	亀比売に誘われ主人公が異界「蓬山」へ赴く時に比売に眠らされ現世(故郷)へ帰還する時にも眠らされた。	異界のかぐや姫が人間界に降された時の状況は不明(但し異界からの「乗物」は前項2参照)。異界(天上界)への昇天時には天人の壺の薬をなめ天の羽衣を着せられ飛ぶ車で月に帰った。
4	求婚者の比較	異界の者である亀比売(ここでは姫は求婚者の側)「五色の亀」が主人公(現世の人間)を誘い「蓬山」で結婚。三年を過ごし、亀比売と心を通わせた(一旦結婚はしたが、主人公の帰郷で最終的には破局した)。	五人の貴公子(人間)が異界の者であるかぐや姫に求婚したが、姫の課した結婚の条件(難題)は達せられない。帝も姫に入内を迫るが拒否される。その後は歌や手紙を交わし三年ほど心を通わせるが、姫は昇天した。

5	二親の対比と親による主人公への説明の比較 「蓬山」(異界)には亀比売の両親がいた。(この両親は神仙であった)また亀比売の「親(神仙)から主人公親子に「人間と仙都との別」が説かれた。	月の都から来訪したかぐや姫には実の両親はいるようだがそれは思い出せないという。姫の養父母となったのは翁夫婦である。翁(養親)からかぐや姫に対し、人間界の常識や、男と結婚すべきとの女性の生き方が説かれた。
6	祝宴の比較 異界へと赴いた主人公は「蓬山」で祝宴が催され歓迎を受けた。	翁夫婦は一人前の女性に成長したかぐや姫の成人式として、髪上げ、装飾を行い「なよ竹のかぐや姫」と命名し祝宴を催した。
7	神婚の比較 主人公(人間)は異界の者(亀比売)と一日結(神)婚が成立。	かぐや姫は人間の貴公子や帝の求婚を却け結(神)婚は不成立。
8	異界と現世での滞在期間の共通点とその時間経過の差の比較 主人公は異界(蓬山)に赴き、亀比売と結婚し異界で亀比売と心を通わすこと三年に及んだ。 亀比売と別れ、主人公の帰還後、この三年は現世では三百年の経過であった。	異界(月の都)からかぐや姫は現世に降され、翁夫婦に養育され成長の後に、帝と心を通わすことが、三年程に及んだ。 姫の昇天の段で天人は、翁に対し姫を「片時のほど」降したと言った。
9	主人公の帰郷の心情の比較 主人公は異界(蓬山)で亀比売と三年を過ごしたが、故郷の両親が恋しく、この嘆きを察知した亀比売に、暫く故郷に戻り、両親に会う事を許してほしいと言う。主人公は異界にあつて現世(の父母・故郷)を想い慕っている。	かぐや姫は帝と歌や手紙で心を通わし三年程が経った頃、月を見てこの思いにふけり泣いた。 これを心配する翁夫婦に自分は月の都の者でもうすぐ迎えが来るので月に帰らなくてはならないと打ち明けた。かぐや姫は月に実の親はいるが、それは思い出せないと言い、現世の養父母との別れが悲しいのだと言った。
10	異界の者が人間に贈った「もの」の比較 亀比売は別れに際し、主人公に玉匣を渡し私を忘れずここを尋ねようと思うなら玉匣を開けると言った。しかし主人公はこの禁忌を破つて玉匣を開けた。	かぐや姫は昇天の際、翁に手紙を渡し帝には手紙と不死の薬を献上した。しかし、姫の昇天後帝は手紙と不死の薬を駿河国の高い山の頂で燃やすよう命じた。

右の両作品の構造比較のまとめに基づいて、以下にその分析結果を掲出してみたい。

(1) 「基本構造」(番号0)の①「往訪譚」対「来訪譚」、②主たる舞台の「異界」対「現世」、③主人公の「地上世界への帰還」対「天上世界への昇天」という基本的枠組みが物語の部分的構造(叙述の細部の対照性)(1~10)を規

定していると考えられる。

(2) 前項(1)の規定性は、両作品の時間・空間の扱い方の構図(後述)を次のように規定する。

『風土記』の場面展開 A ↓ B ↓ A と、『竹取物語』の場面展開 A ↓ B ↓ A とでは、Bの場面が「異界」対「現世」と対照的構造である。その詳細は次のようなものである。

○『風土記』は、「物語の主たる舞台」が、以下の A ↓ B ↓ A の順に展開する。

A 「現世＋異界の混在領域」(※私見では現世と異界との「境界」は「可動的なもの」と考えられ、嶼子に接近する亀比売(異界の者)の状況は「異界の張り出し」が、「現世」に及んでいる、と考えるものである。) ↓ B 「異界」(※現世の者である浦嶋子は、異界に於いては滞在が不可能と考えられるから、時空両面で浦嶋子には何らかの異界で生存しうる操作(＝術)、例えば「眠らされ」(前掲二、の表3)等がなされたと考えられる。) ↓ A 「現世＋異界の混在領域」(※嶼子は、現世に帰還したが、玉匣という「異界の属性を帯びた物」を持つているため、前記同様「異界の張り出し」が「現世」に及んでいると考えられる。)

●『竹取物語』は、「物語の主たる舞台」が、以下の A ↓ B ↓ A の順に展開する。

A 「現世＋異界の混在領域」(※私見では翁が、竹の中に「小さ子(女の子)」を発見した状況も、現世に在りながら女の子(異界の者)が居て「異界の張り出し」が「現世」に及んでいると考えるものである。) ↓ B 「現世」(※異界の者であるかぐや姫が、現世に於いて生きられるのは難しいと考えられるから、時空両面でかぐや姫が現世に淹留しうる操作(術)がなされたと考えられる。) ↓ A 「現世＋異界の混在領域」(※かぐや姫の昇天の場面では、天人(異界の者)が降下し姫を迎える。この場面の天人の出現、天の羽衣、不死の薬、飛ぶ車等の「異界の属性を帯びた物」が在るため、『風土記』同様に「異界の張り出し」が「現世」に及んでいるものと考えられる。)

(3) 両作品の構造に共通の「物語の基幹になると考えられる数字」は「三」と「五」である。

①番号0の両作品の主人公の淹留期間のうち、嶼子と亀比売との夫婦としての期間は、「三年」であり、また、か

ぐや姫と帝との交流期間は「三年程」と共通する。

②番号2の両作品の異界の者の出現状況に「三日三夜」・「三寸」と「三」が共通する。

③番号8の両作品の異界と現世との時間経過の差異では、『風土記』では異界の「三年」は現世の「三百年」にあたり、『竹取物語』では、かぐや姫の現世滞在期間が「片時」となり、両作品共に時間差の尺度は矛盾なく共通していると考えられる。

四、まとめ

以上述べてきた両作品の構造比較の作業から明らかになった点を述べ、結論としたい。『丹後国風土記』(逸文)「浦嶋子」と『竹取物語』との構造を比較、分析してみると、両作品の全体的、部分的な構造に於ける場面の対照性が指摘できる。しかもこの対照性は、陰と陽と言える程のものであり、それは全体(基本)構造が部分的構造を規定している。

前節までに神仙思想の影響を受けつつも、構造が対照的な二作品を観察し考察を加えたのであるが、天上(神仙)世界を主たる舞台とした『丹後国風土記』(逸文)「浦嶋子」に対し、なぜ『竹取物語』では地上(人間)世界が舞台として描かれるようになったのか。それは、物語作者の創作意図が、人間界或いは人間の価値を神仙世界より優位に置いたことによるものと考えられる。その実現には、大胆な構造転換が必要であった。構造的に「浦嶋子」の内容を対照的に反転することは、人間中心の世界を描くことにほかならなかったという点に落ち着く。前節の各比較項目の、番号1〜10のうち、番号5は、異界に迎えられた主人公(人間)と、人間世界に降された主人公(異界の者)との対比である。両作品共に番号6の祝宴を経て、番号8の異界と現世それぞれの滞在となり、その結果、番号9の主人

公の故郷への帰還となる展開である。これは作品の主要部分が対照的であることを示す。

前項の構造の対照性は、同時に両作品の舞台（時間性・空間性）の対照的構造でもある。この点が、『竹取物語』の特色といえる「神仙否定の論理」の構造的枠組みとなっている。

この点を構造的に言うなら、両作品それぞれに、作品の舞台である現世対異界の場面の分量的比率を考えた場合、どちらを多い比率として描くか、という構造の差となつてその作品世界の価値が決定つけられる。つまり構造的性の差異は作品世界の価値をも表している。

より具体的には、『風土記』（逸文）『浦嶋子』では、神仙世界は、人間にとつて懐れの楽土と考えられ、作者もそのように考えたであろうから、神仙世界（蓬山^{トシヨウ}）の場面の比率が多くなつたのだろう。そして結末は、この楽土から帰還した主人公嶋子は、禁忌を破り「異界に淹留した人間」としての無理を一身に背負い、一瞬の老化という結末を迎える。

一方『竹取物語』では、冒頭から異界（神仙世界）の者が人間界に降され、その滞在期間中に成長する。結末は、異界（神仙世界）への帰還であつたが、主人公かぐや姫は、人間界に淹留した異界の者として、人間界滞在中に人間の苦楽や人生の哀歓を知り、人間愛を育むことになつた。特に翁夫婦との恩愛の絆や、帝との交流は、かぐや姫という異界の者の「人間化」をもたらした。その結果、嶋子とは逆に、姫は「現世に滞在した神仙」としての人間の苦悩を一身に背負うことになつた。渡辺秀夫氏はこの点に関して「不死薬そのものを退け、却つて、この「穢濁」なる地上的の、へもの思ひ」深き人間的なるものまゝに、神仙を無化し乗り越えた、物語文学としての新たな深刻な主題の開拓⁽¹⁵⁾と述べる。

このように、両作品の構造の対照性は、神仙世界をどのように見るか、という作者の立脚点でもあり、この構造的性が『竹取物語』の神仙否定の論理の枠組みになっていてと考えられる。逆に言えば神仙否定の論理を表出するための構造を、『風土記』の構造を転換することにより実現、作品化したということが『竹取物語』の形成過程ではなかつ

たろうか。

本作品の意義を明らかにすることで、本朝神仙・異界思想文学史上の定位を考えてみると、本論考で考察した『風土記』（逸文）「浦嶋子」から、『竹取物語』への大胆な構造転換は、神仙思想に対する奈良朝の「憧憬的受容」から平安朝初期の「批判的受容」を経て、ここに至って先蹤文学をふまえた「創造的受容」への大きな転換点と見做すことができる。

本論考で考察した『風土記』『浦嶋子』から『竹取物語』への構造転換の意味するものは、神仙・異界憧憬から人間界、地上世界、現世への視点の転換であり、主題そのものの変換であった。それは「人間」の発見にして、神仙否定の論理の創出であったといえよう。

上述の『風土記』嶋子の蓬山淹留から帰還への流れは、天上の樂園に憧れつつも、そのような夢が叶った時には、やはり人間界に生きたいと願う矛盾した存在が人間であった。

『竹取物語』に於いても、かぐや姫は昇天の場面で次のような振る舞いを見せている。

（天人が）御衣をとり出て、着せんとす。その時に、かぐや姫、「しばし待て」と言ふ。「衣着せつる人は、心異になるなりといふ。物ひと言、言ひをくべき事ありけり」と言ひて、文書く。天人、「遅し」と、心もとながり給。かぐや姫、「物しらぬことなの給ぞ」とて、いみじくしづかに、朝廷に御文たてまつり給。

姫に天の羽衣を着せようとする天人を待たせ、姫は帝宛ての手紙を書き始める。「遅し」と待ち遠しがる天人に対し「物しらぬことなの給ぞ」と誠める。「物の情を解さぬことを言いなさるな」との発言には、「物思う」人間世界と「物思いのない」天上世界との対比が読み取れる。物事の情こそかぐや姫が人間界で学んだことであった。「物思い」というあれこれ思い悩む事が人間であり、そのような人間が愛おしいのだ、という姫の心情はもはや人間の魅力的な女性として我々の胸を打つ。そこには「人間の情」に価値を見出した作者の意図が感じられる。神仙譚でありながら人間回帰がこの物語の目指す世界であった。

藤原克己氏は、『竹取物語』と同時代の作品である漢文伝「白石先生伝」との類似性に言及している¹⁹⁾。この伝の作者紀長谷雄は、白石先生を、神仙として昇天を志向せずあえて地上に留まろうとする人間として描いている。その態度には有限な人間存在の尊重を見出すことができる。またその神仙否定の論理は、『竹取物語』と軌を一にしているものと考えられる。かぐや姫は天上界の神仙として生まれ、地上に降された異界の者であったが、彼女の人間という儂い存在への眼差しは、神仙自身による神仙否定の姿となつて物語を印象付ける。そこに汲み取れるのは、人間の情という神仙界と対極的な価値である。それはまた神仙界の無限に対する人間の有限なるが故の尊さの発見という大きな主題であつた。

我が国の神仙・異界思想文学史上、このような神仙否定の論理を打ち出した作品の出現は、単純な否定ではないと考えられる。『竹取物語』以前の神仙思想関連作品の系譜を辿れば、奈良朝の『懐風藻』吉野詩には、「神仙憧憬の受容態度」が認められる。またそれは、平安朝初期には『三教指帰』のような「神仙批判的受容態度」を経て、『竹取物語』の出現となる。『竹取物語』は、これら先蹤文学の受容態度を取り込んだうえで神仙否定を行っている。それはいわば止揚ととらえられ、対立する神仙憧憬を否定しつつも、この神仙界との高次元における統合をはかったものであり、神仙思想作品の系譜上、弁証法的な発展を遂げた神仙否定の論理を打ち出した作品であつた、と言えるのではないだろうか。

註

- (1) 三谷栄一『竹取物語』総説（鑑賞日本古典文学第6巻『竹取物語・宇津保物語』、角川書店、昭和五十年）
- (2) 関根賢司『竹取物語』〈伝承から物語へ〉（大曾根章介他編『研究資料日本古典文学①』明治書院、昭和五十八年）七頁。
- (3) 渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、平成三年）四三七頁。

- (4) 出雲路修校注『日本靈異記』（新日本古典文学大系30、岩波書店、平成八年）二六頁。一七頁に「其の風流なる事に神仙感応し」とある。多田一臣『日本靈異記上』（ちくま学芸文庫、平成九年）一二五頁の同話【補説】に「本話は一種の神仙譚である。」
- (5) 三谷栄一編『竹取物語・宇津保物語』（角川書店）、上坂信男『竹取物語全訳注』（講談社）、堀内秀晃校注『竹取物語』（岩波書店）、上坂信男『竹取物語全評釈本文評釈篇』（右文書院）、室伏信助訳注『新版竹取物語』（角川書店）、竹田友宏『竹取物語（全）』（角川書店）、関根賢司・高橋亨編『新編竹取物語』（おうふう）〔以上、発行年順〕
- (6) 高橋亨『竹取物語解説』（関根賢司・高橋亨編『新編竹取物語』おうふう、平成十五年）
- (7) 註(3)四四〇頁。
- (8) 加納諸平稿『竹取物語考』（『國文學註釋叢書（五）』、名著刊行會、昭和四年）
- (9) 註(1)五三頁。
- (10) 註(3)四四九頁注63の諸家の見解。
- (11) 武田友宏『竹取物語』（ビギナース・クラシックス日本の古典、角川ソフィア文庫、角川学芸出版、平成二十四年）一七頁。
- (12) 重松明久『浦島子伝』（現代思潮社、昭和五十六年）一七頁。
- (13) 水野祐『古代社会と浦島伝説』上（雄山閣、昭和五十年）五六頁。
- (14) 註(1)五五頁。
- (15) 註(3)四四〇頁。
- (16) 藤原克己『王朝漢文学と物語』（多田一臣・藤原克己『改訂新版日本の古典古代編』所収、放送大学教育振興会、平成二十一年）二二六〜二二七頁。